

# いちのへ御所野縄文学の取組について

～将来を担う人材の育成を目指して～

一戸町教育委員会（岩手県）

## 1. はじめに

一戸町は、岩手県の内陸北部に位置する人口約 10, 000 人の町で、小学校 3 校と中学校 2 校に児童生徒約 500 人が在籍している。

当町には全国で初めて「土屋根住居」の存在が確認された国指定史跡である「御所野遺跡」があり、令和元年 7 月に、世界文化遺産登録に向けたユネスコへの推薦候補に「北海道・北日本の縄文遺跡」として選定された。そして、令和 3 年 7 月、第 44 回世界遺産委員会において、岩手県一戸町の国指定遺跡「御所野遺跡」を含む「北海道・北東北の縄文遺跡群」は、正式に世界遺産登録が決定した。

学校教育においては平成 28 年度から「いちのへ御所野縄文学事業」を立ち上げ、郷土や地域について探究的に学ぶことを通して、ふるさとに誇りをもち、主体的に生きる子どもの育成をねらいとした教育活動の在り方について検討を進めている。

一戸町では、各小学校の 6 年生、各中学校の 3 年生を対象として「一戸 PR 大使」を任命している。一戸町の魅力を町内、県内、県外の方に伝えるべく、学校行事や修学旅行先等で一戸町を PR する活動を行っている。

## 2. 教育目標

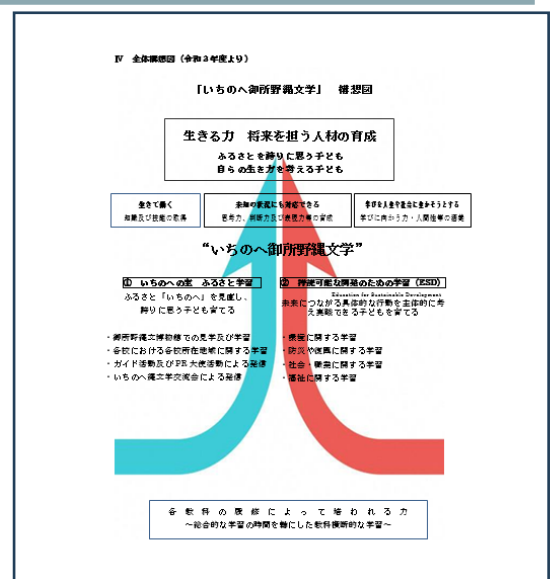
- 1 生産意欲に燃え明るい町づくりに励む 民主的な人
- 2 広い視野にたち高い文化を想像する 科学的な人
- 3 自他を敬愛し豊かな情操を培う 協調的な人
- 4 誠意と粘り強さをもちすすんで理想を追求する 行動的な人
- 5 衛生思想を高めたくましい体をつくる 研億的な人

## 3. 教育委員会・学校での取組

令和 3 年度から、いちのへ御所野縄文学を大きな二つの柱の学習として整理し、学校の実態により、「総合的な学習の時間」や「学校行事」等において実践するものとした。

一つ目の柱は、一戸町の宝である御所野縄文への知識を深める「ふるさと学習」である。さまざまな体験を基本に据えて、発展的に地域の宝に目を向け、自分の言葉で発信できる子どもの育成を目指す。

二つ目の柱は、御所野縄文文化の普遍的価値から一戸町の持続可能な開発を考えるための学習である。環境、防災や復興、社会や職業、福祉などを視点に、他者とかかわりながらよりよく生きること、未来につながる具体的な行動を主体的に考え、実践する子どもの育成を目指す。



【いちのへ御所野縄文学 構想図】

いちのへ御所野縄文学を推進するにあたり、今年度は3つの事業に取り組んだ。

(1) 第1回いちのへ御所野縄文学推進委員会（「総合的な学習の時間」授業参観）

「いちのへ御所野縄文学事業の内容や計画等について確認し、総合的な学習の時間に係る授業参観を通して、その在り方について学び合うこと」を目的として実施した。公開した授業においては、事前に児童が考えた一戸町の魅力、そして修学旅行先で学んだ県内外の魅力について整理し、一戸町をもっと盛り上げるために考えられることを児童が考える姿が見られた。協議の時間においては、各校の昨年度の取組について報告し、今年度の活動に関する情報共有を行った。

(2) 第2回いちのへ御所野縄文学推進委員会（転入教職員対象研修会）

「今年度一戸町へ新たに赴任した教職員が、いちのへ御所野縄文学の理念や御所野縄文遺跡の魅力について学ぶ機会を設けることを通して、今後の実践の見通しをもつこと」を目的として実施した。町内の小学校が長年取り組んでいる「御所野子どもガイド」により、御所野縄文遺跡について学んだ。参加者からは、「実際に体験したり調べたりしているからこそ、自分の言葉で説明や案内ができていた」「チームで協力し、はきはきと説明する姿に郷土を誇りに思う気持ちが伝わってきた」という感想が寄せられた。

(3) 第3回いちのへ御所野縄文学推進委員会（いちのへ御所野縄文学実践交流発表会）

「いちのへ御所野縄文学の学習活動を互いに発信・交流し合うことにより、今年度の活動の振り返りと今後の活動の意欲付けを図ること」を目的として実施した。学習活動の発表は、各校の6年生が行った。御所野縄文遺跡についての調査探究活動に関する発表、一戸町の特産品を町外、県外に広めるための取組に関する発表、一戸町のまちづくりとして進めたいことを企画書として作成したことに関する発表だった。各校5年生が参加したことにより、各校の取組を次の世代の児童が聞くことにもつながった。また、地域の方にも広く参加を呼びかけたことにより、児童の活動をより多くの方々に知っていただく機会となった。



【実践交流発表会の様子】

#### 4. おわりに

いちのへ御所野縄文学の成果として、児童生徒が一戸町の魅力に改めて気づくことができたこと、そしてその魅力について地域の方や県外の方へ発信できたことが挙げられる。課題として、実践交流会について各校へ過度な負担をかけることなく続けていけるよう、発表時間や内容を吟味することが挙げられる。

今後もさまざまな体験を基本に据えてさらに地域の宝に目を向け、自分の言葉で発信できる子どもの育成を目指し、いちのへ御所野縄文学の取組を行っていききたい。